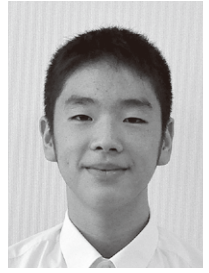


優良賞

悔いを残さないために



青森市立筒井中学校 3年 福田 公平

「あれ、教科書ないや…。また置き勉強調べやったの？福田、厳しすぎるよ。先生に叱られちゃうじゃん。」
そう言いながら、仕方ないな…と受け入れてくれているクラスメイトの言葉。

僕は学習係、そして学級会長として、放課後、机の中に置き去りにになっている勉強道具を放置しておくわけにはいかないのです。クラスメイトには嫌がられてしまいますが、それでもこの仕事はやり遂げなければなりません。そう思うようになったのは、ある経験がきっかけでした。

僕は小学校4年生の頃から、少しずつ太り始めてしまったのです。そんなこともあって、小学校2年生からやっていたクラブチームのサッカーに加え、学校の部活でバスケットボールも始めました。しかし、体重は増加し、6年生では遂に、軽度肥満の域に達してしまいました。もしかしたら、自分の生活が悪かったのかもしれませんが。しかし、一生懸命に運動に取り組み、その状態を打破しようと努力していました。

6年生のとある夏の日、サッカーの練習中のことです。

「にく。」「ん？」

何のことを言っているのか、振り向くと、「ははは」と笑って走り去っていくチームメイトがいました。そして、僕の方をちらっと見て目を伏せてしまう人。急にみんなの態度がよそよそしく感じられました。そのうち、それだけでなく、

「ごみ」「5329」など、そのあだ名はエスカレートしてきました。

「やめて！」僕は、何度も何度も本人たちに言いました。僕は傷ついていました。しかし、彼らは僕の気持ちには気づいていませんでした。それどころか、僕を「肉」「ゴミ」という人は増えていきました。「やめて！」何度叫んでも、僕の気持ちは彼らの心には届きませんでした。僕はチームを辞める決断をしました。自分が一番気にしていたことを馬鹿にされ、深く傷つき、自分が好きだったことさえできなくなったのです。小さい頃から続けてきたことなのに…。

いじめは、その人の人生を狂わす卑劣なものです。僕は身をもって知りました。そして、この経験は僕の心に一生残るのです。中学生になってからはそのことを馬鹿にする人はいなくなり、やりたいことをのびのびとすることができています。

しかし、あの時、あのいじめに立ち向かえなかった自分は何なのだろう。自分にはどうにもできなかった体の欠点を言われ、やりたかったサッカーをやめてしまったこと。悪いのはあいつらなのに…。結局、自分が身を引くしかなかったのはなぜなのか。嫌だ、ということと言い続けられなかったことは、その言葉を受け入れてしまったということではないか、と悩み始めました。

僕が達した結論は、自分を乗り越えなければ本当に求めているものは得られない、ということです。信念を曲げると、自分が信じていることはすべてうそになってしまう。信念を曲げてしまった自分が、許せなくなってきました。

だから、それからの自分は、正しいことを貫き通す、と決めました。もちろんすべて自分の思い通りにしようというわけではありません。自分がやるべきこと、大事にしたい考え、学校での生活。そういったことは妥協しないことに決めました。これが僕の信念です。もう自分を許せない、と後悔したくないのです。

「みなさん、今日も放課後、置き勉強調べをします。」

それは、自分が正しいことをしているという信念です。